

第3章 紀州徳川家の時代



イワシ網と捕鯨



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

イワシ網漁師の他国出漁

おおさかわん
大阪湾から紀伊半島北西部にかけ
ての漁村では、16世紀末に八田網
(八手網)、中高網とよばれるイワシ
網が開発され、九州方面へも出漁し
ていました。加太・塩津・栖原・湯
浅・広などが中心でしたが、出漁民
たちはその途中の瀬戸内海も良い漁
場であるのを発見しました。

17世紀はじめに塩津浦の漁民が
八田網を用いて、安芸(広島県)・周
防(山口県)のイワシ網漁場を開い
ています。また、塩津浦の漁民は、
備中真鍋島(岡山県)の鯛網漁場も

開き、17世紀後半まで約70年間にわたって出漁していました。

その後、西日本でのイワシの漁獲高が減ったため、関東漁場へ出漁先をかえていきます。江川(田辺市)
など紀南の漁村からも出漁するようになりました。このようにイワシ漁が盛んになったのは、畿内および
周辺地域で、綿作の栽培面積が増え、需要の大きくなった肥料(干鰯)の原料に使用されたからです。イ
ワシ網漁には、干鰯を畿内の綿作地帯へ運ぶための魚商人が、いっしょに行動していました。

房総半島(千葉県)や九十九里浜あたりの漁村では、まだイワシ網漁が十分発達していなかったので、
地元漁民が漁場について権利を主張しなかったことが、紀州漁民の出漁を可能にしたのです。しかし、18
世紀中ごろ、関東の漁民も出漁民から新しい漁業技術を学びながら成長して、紀州などの他国の出漁民と
対立するようになると、紀州漁民は、地元漁民に追われて関東漁場から引きあげました。

この間、江戸は100万都市として栄え、干鰯はもちろん、関東の漁村で生産される海産物は、江戸の間
屋が支配して取り扱うようになりました。有田郡出身の栖原屋角兵衛のように、紀州の出漁民のうちにも、
江戸へ進出して漁獲物だけでなく木材・薪炭を取り扱う問屋として成功し、出版業まで手がける者も出て
きました。さらに栖原屋は、紀州藩との関係で熊野材など紀州産の木材を扱っていますが、幕府との関係
を深めて、東北日本の漁場から蝦夷(北海道)のニシン漁場の開発にも進出していきました。

江戸時代、鎖国によって、海外との交易が自由にできなくなりますが、国内で漁場を拓く紀州漁民のよ
うな生き方をする人もいたのです。江戸時代に日本の漁業は大いに発展しましたが、その中でも紀州の漁



イワシ網漁「熊中奇観」(部分) (和歌山県立博物館蔵)

民の活躍を見逃すわけにはいきません。

突取捕鯨から網取捕鯨へ

20 艘ぐらいの船で船団を組んで鯨を追い、もりを打ち込んで仕とめる捕鯨法を突取法といいます。太地浦で突取法による捕鯨業が始まるのが、1606（慶長11）年とする説が広く知られています。『紀伊続風土記』によっているのですが、その真偽はさらに検討が必要です。1661（寛文元）年の記録によると、三輪崎（新宮市）から24年間に羽刺（鯨をもりで突く人）25人、加子（船乗り）2人が五島列島の近海での捕鯨にやとわれています。1664年に船足の早い八挺櫓で、五色に塗った鯨船をあやつるようになると、鯨を捕えやすくなりました。

1675（延宝3）年12月、太地・浦神・下里・森浦・勝浦・宇久井・三輪崎など熊野の7か浦の庄屋が集まって突取法に関する定書を作っています。捕鯨にたずさわる漁民がふえるとともに、漁場をめぐる対立も生じ、漁村間で調整が必要になったと考えられます。これとよく似た定書が、志摩（三重県）の21か村の間で、すでに1649（慶安2）年11月にとりかわされています。太地など7か浦は、お互いの利益を守るため、志摩の捕鯨を参考にしながら定書をつくったのでしょう。

1677年、突取法に網を用いる捕鯨業が太地浦で試みられました。網取法とよびます。網を使って鯨の行動範囲をせばめてもりで突くのですから、突取法で捕えられなかった、胸びれが大きく動きの速いザトウ鯨も捕獲ができるようになりました。捕鯨の漁具も漁船も増え、大規模になって捕獲数も多くなり、村も繁栄しました。井原西鶴が、『日本永代蔵』で、網取法の開発により捕鯨業が発展し、太地浦が繁栄した状況を伝えています。

太地浦へは、他国からも捕鯨法を学びにきました。太地角右衛門ら熊野の漁民が指導しています。網取法は、すぐ各地に伝わりました。古座浦では、紀州藩が鯨方役所を設けて藩営で捕鯨を行なっています。新宮領主の水野氏も三輪崎に鯨方役所を設立しました。大漁であれば収入もあがったのですが、捕鯨業は設備が巨大で、多数の漁夫を抱えておかなければならず、出費も多かったようです。特に幕末になって外国の捕鯨船が沖合で鯨をとらえるので、めっきりとれなくなりました。ともかく、太地浦で開発された網取法は、伝統的な紀州捕鯨として江戸時代をとおして行われていました。



紀州熊野浦捕鯨図屏風（部分）（和歌山県立博物館蔵）